

学校自己評価（年度末自己評価）の分析と具体的な改善に向けて

◇成果の見られた事項（**3.2ポイント以上＝青色**）については、本校の強みとしてアピールし、さらに伸ばす！

◇課題・問題点については（**2.6ポイント以下＝黄色**）、改善の優先順位を決め（短期的視点・中期的視点・長期的視点から）、具体的な改善策を提案し合いましょう。

◇全体のまとめ

（１）集計結果の見方

①「評価平均」の右隣の（ ）の中の数字が、昨年度の年度末自己評価の数値になります。また、＜ ＞の数字は、昨年度にない評価項目ですので、今年度の中間自己評価との比較になります。さらに、その隣の数字は、昨年度の数値と今年度とを比較したプラスまたはマイナスの数字です。

②比較した数字が±0.3以上の違いがあるものについては、薄い水色とオレンジ色で示しています。

③もちろん教職員が変わり、生徒が変わっていますので、数値は絶対のものではありません。ただし、その傾向をきちんと把握し、分析することは非常に大切なことです。

※継続的にご指摘のあった学校評価の問題点については、来年度からは、数値にできるだけ客観性を持たせるための評価基準の設定を検討します（後述）。

（２）今回の集計結果の傾向

①全体の評価平均については、昨年度と同じ3.0で、少しずつではありますが上昇傾向にあると言えます。※平成24年度以前は、ずっと2.7～2.9で推移していました。

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
☆ 中間自己評価	2.9	3.0	3.0
☆ 年度末自己評価	3.0	3.0	3.0

ア 昨年度の年度末自己評価と比べて

- 青色の強みの項目数が、13項目から7項目に減っています。
- 黄色の弱みの項目数が、2項目から3項目に増えています。
- 37項目中、プラスの項目が9、マイナスの項目が17ありました。
- 0.3ポイントの大きな変化は、プラス面が3つ、マイナス面が1でした。

※昨年度に比べてマイナスの項目が増えているのに、全体の評価が変わらないのは、プラスの項目数は少ないが、プラス幅の大きいものがあるからです。

②「無回答」の数が、昨年度の79項目から108項目とさらに増えました。

ア 評価項目としての適切さ

- a 昨年度から各分掌における評価項目を、教育計画の「評価の観点」とリンクさせており、自己評価項目としては、さらに改善しなければならない点があります。

＜具体例＞学校評価ですので、基本的には個人の評価ではなく、学校としての評価になります（全員がすべての項目に回答する）
項目の中には、自分としてなら評価できるが（または、自分が所属している分掌のことなら評価できる）、学校としての評価はしにくい項目が含まれています。

参考 文科省から出されている学校評価ガイドラインから

◎本来であれば自己評価は、教育活動や学校運営に対して目標を設定し（その目標設定が評価項目になります）、同じ評価項目について、次の2つの観点から評価をしなければなりません。

◆達成状況

◆取組の適切さ



◇今後は、その2つの観点を意識した評価項目の設定や評価の仕方を考えていかなければなりません。

◇また、これ以外に「数値目標」を設定していただいていますますが、そちらの方は、主に達成状況を図る指標になりますので、今回の年度末自己評価と上手くミックスさせることで相乗効果が出るものと考えます。

◇今年度の「数値目標」に対する達成度合いや分析については、現在、各分掌・学年にお願いしている最中です。

分掌部長の先生にお願いします！

新年度の教育計画を立てる際の「評価の観点（規準）」については、他の分掌の先生方からも評価しやすい項目の設定をお願いします。

部内等一部の先生方しかわからない（わかりにくい）「評価の観点（規準）」については、可能な限り数値目標として設定し、定量的評価をお願いします。

さらに、「評価の観点（規準）」を提出してもらう際に、「大体そう思う」の評価基準も設定していただくことにしたいのですが検討をお願いします。

具体例）

☆教務部の朝読書を例にすると、

「評価の観点（規準）」

～ 朝読書を通して読書習慣の向上を図ることができたか。

↓

「評価基準＝だいたいそう思うの基準」

～ だいたいの生徒（90%程度）が朝読書に集中して取り組んでいる。

※読書習慣の向上が図られたかどうかは全職員にはよくわからないので、例えばそれを補うための数値目標を設定する。

「図書館の1ヶ月の貸し出し平均数を現在の〇〇冊から〇〇冊に引き上げる」

（３）学校評価をどう活用するのか？

【学校評価の目的とは】

ア 教育活動や学校運営に対して、目標を設定し、その達成状況や取組の適切さを評価することにより、
学校として組織的・継続的な改善を図るため

イ その結果を公表し、説明責任を果たすことにより、学校・家庭・地域の連携協力による開かれた学校づくりを進めるため

ウ 学校全体としての取組や動き（他分掌・他学年であっても）を知り、教員一人一人の学校経営に対する参画意識を高めるため

【学校評価の種類】

ア 学校自己評価……各学校の教職員が行う評価（本校では中間と年度末の2回実施しています）

イ 学校関係者評価……保護者、地域住民等の学校関係者などによって構成された評価委員会等が、学校の教職員が行った学校自己評価の結果について評価することを基本として行う評価。

※本校では、学校評議員から学校自己評価についての評価をいただいている。

ウ 第三者評価……学校と直接関係を有しない専門家等による客観的な評価

※本校では、まだ実施していない。

注）「学校関係者評価」と「第三者評価」の2つを「外部評価」とし、学校自己評価の参考として行っている生徒や保護者、地域住民等を対象とするアンケートは、「外部アンケート」として区別する。

【本校における学校自己評価の年間スケジュール】

4月初旬	教育計画の確定 → 各分掌・学年から出された「評価の観点」を学校自己評価の項目に (※教育計画と学校評価のリンク)
8月下旬	中間自己評価の実施
9月初旬	中間自己評価の集計と分析
9月中旬	中間自己評価の公表・説明（HPでも）
9月中～10月中	各分掌・学年において、評価の結果・分析から改善策を話し合う
10月下旬	中間評価改善会議にて各分掌・学年から出された改善策を検討→実施へ ※今年度に関しては、日程の関係で11月2日（月）に実施
11月中旬	総務部による保護者アンケートの実施 → 1月中に結果・分析
冬休み明け	年度末自己評価の実施
1月下旬	年度末自己評価の集計と分析

2月初旬	年度末自己評価の公表・説明（HPでも）
2月中旬	各分掌・学年において、評価の結果・分析から改善策を話し合う ※学校関係者評価・保護者アンケートの結果・分析も取り入れる
2月下旬	学校評議員による学校関係者評価
2月下旬	年度末評価改善会議にて各分掌・学年から出された改善策を検討 → 来年度の具体的な改善策を新分掌へ引き継ぐ
3月中旬	新分掌・学年で新年度の教育計画の策定

◎学校力（先生方個々の力＋組織としての力）を高めることが、最終的に生徒一人ひとりの可能性を最大限に引き出すことにつながります。

課題意識と当事者意識をもち、課題の明確化・重点化を図り、一人一人が学校運営に参画してください。

※今年度に関しては、「進学校」としての役割を果たすべく、中間評価改善会議等での意見を踏まえて、校務運営会議を中心に来年度に向けての具体的な提案が始まっています（2月の職員会議において、各分掌から来年度に向けての具体的な改善策が提示される予定です）。

1 教育計画・運営組織

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
☆ 中間自己評価	2. 8	2. 8	3. 0
☆ 年度末自己評価	2. 9	2. 9	2. 8

（1）分析結果

①学校教育目標：

「高い志を持ち、自己を創造し、真理を追求する心と未来を拓く力を育む」

については、概ね評価されている。

→ まずは、高い志を支え、それを実現できる学校体制の確立に向けて、各分掌から具体的な提案をしていただく。

②「教職員の相互理解のもと、協働する組織体として機能している」とはいえない。

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
☆ 中間自己評価	2. 6	2. 6	2. 7
☆ 年度末自己評価	2. 6	2. 6	2. 5

→ 学校としての組織力が求められている時代に、本校において44%の先生方が「どんな点で協働する組織体として機能していない」と考えているのか、具体的な検証・分析が必要です。その上で、具体的な改善策を検討します。※来年度の校務分掌を組織する上での参考にもしたいと考えます。

③「教職員としての専門性を向上するための研修が充実している」とはいえない。

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
☆ 中間自己評価	2. 6	2. 6	2. 9
☆ 年度末自己評価	2. 7	2. 7	2. 7

→ 分掌ごとの学校課題（教務・進路・SSH・生徒指導＜教育相談＞等）における校内研修は、計画的に行われるようになりました。ただ、教科の研修という面では合評会の在り方や次期学習指導要領を踏まえて改善しなければならない。

※教科の研修については教務部で改善案を検討する

④「教職員の健康管理や福利厚生について配慮された職場環境」とはいえない。

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
☆ 中間自己評価	2. 8	2. 7	2. 8
☆ 年度末自己評価	2. 8	2. 8	2. 8

→ プロジェクトチーム等を活用して「時間外勤務縮減」に向けた具体的な提案をします。

2 総 務 部

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
☆ 中間自己評価	3.0	3.1	3.2
☆ 年度末自己評価	3.1	3.2	3.2

(1) 分析結果

- ①すべての項目で評価3.0を超えており、高い評価結果になっています。
- ②次の3つの項目が本校の強みとなっています。
 - ア「学校運営の円滑化に資することができたか」
 - 「行事の適切な運営・連携を図ることができたか」
 - 昨年度から校務運営会議や職員会議において、3ヶ月分の行事予定表を配る等、先を見通した調整、連絡が評価されたものと考えます。
 - イ「中学校等への情報発信・説明会などを通じて、本校の教育活動への理解の深化を図ることができたか」
 - 学校説明会では、説明をビジュアル的にするなど他校との差別化を図った。説明内容としては、滝川高校に入学したら何ができてどんな力を伸ばすことができるのかをSSHの取組を中心にお話しをさせていただいている。その効果もあり、学区内の受験者数が大幅に減っている中でも普通科・理数科とも定員を超える出願がありました。先生方のご協力のおかげであり、感謝申し上げます。

3 教 務 部

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
☆ 中間自己評価	2.7	2.9	2.9
☆ 年度末自己評価	2.8	2.9	2.9

(1) 分析結果

- ①全体的な評価は、着実に上がっています。
- ②今年度の中間自己評価から新しく項目に加わった「2生徒自ら学習する態度を育成できたか」という項目で、前回の2.8をさらに下回り、2.6ポイントになりました。学力向上対策のひとつとして生徒の主体性は必要不可欠です。現在、全校で取り組もうとしているアクティブ・ラーニングの研究を進めることも大切になってきます。また、学習指導（学力向上）と生徒指導は車の両輪であり、挨拶指導、清掃指導、時間の有効活用や携帯電話の使い方等、効果的な生徒指導が本校においても改善しなければならない課題のひとつであると考えます。
- ③「シラバスの活用と授業評価」の項目は、評価的にはまだ低いものの、経年比較では徐々にポイントは上がっています。

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
☆ 中間自己評価	2.4	2.6	2.8
☆ 年度末自己評価	2.5	2.6	2.7

- 「活用し、どう授業改善に活かすか」という面での教員サイドの課題が大きいと考えます。滝川高校としての授業改善のシステムを確立させるためには、まずはシラバス作りとその活用が第1歩だという共通理解が必要です（シラバスを理解せず、やらされ感の中でシラバスを作成し、しかも活用しなければ当然、負担感だけが残ります）。シラバスと年間授業計画は根本的に違うものです。せっかく教務部で改良に改良を重ねた形式が後退するようなことがあってはいけません。
 - 活用例）
 - ・授業の目的の明確化
 - ・評価規準の明確化と指導との一体化
(目の前の生徒たちに身に付けさせたい力を考えなければ、授業は変わっていきません)
 - ・学習方法のアドバイス
 - ・系統的に（3年間を見通して）教科としてどんな力を身に付けさせたいのかの明確化
 - ・カリキュラムの構造化（・進度等の授業管理）
- ④「朝読書を通して読書習慣の向上を図ることができたか」の項目が+0.5ポイントとなり大幅上昇となった。
 - 昨年度、プロジェクトチームが中心となって「全校的な朝読書の再構築」を検討し、今年度から再スタートを切った。その点が評価されたものと考えます。ただし、冬期間ということもあり、年度末に近くなるにつれて8時25分に間に合わない生徒が増加傾向にある。指導方法で検討は必要か。
- ⑤「情報機器の整備と情報管理をできたか。」の項目が+0.3ポイントの上昇となった
 - SSH事業をとらして情報機器の整備（コンピュータ・プロジェクター等の購入）が進めてきました。ただし、情報管理の面で利便性とセキュリティーの関係等の検討が必要になっています。

4 生徒指導部

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
☆ 中間自己評価	3. 1	3. 1	3. 0
☆ 年度末自己評価	3. 1	3. 0	3. 0

(1) 分析結果

- ①全体的には、ほぼ昨年度と同じ数値となっています。
- ②「挨拶を欠かさず、地域から信頼され、本校の生徒あるで誇りを持つことのできる生徒を育てる」「社会規範を守り、自らの言動に責任をもてる生徒を育てることができたか」
「問題意識を育て、課題を提起できる執行部を育てることができたか」の3つの項目とも2.9でやや低い傾向にある
→ 総合的な人間力の育成という観点からいずれも高校生として身に付けておかねばならないものであり、「自主・自立」は大切にしつつ教員側からの支援や指導が必要です（積極的な生徒との関わりの中で）。
- ③「多様化する生徒に対応できる教育相談の充実に努めることができたか」が、+0.5ポイントで大きく評価が上がった。
→ ここ数年の生徒の状況から教育相談の充実は、喫緊の課題であり、SCの配置や校内研修会の実施等具体的な活動が評価されました。ただし、現実的に支援を必要とする生徒は増え続けており、しかも深刻化する傾向にあります。生徒理解に係る研修、定期的な教育活動支援委員会の開催や個別の指導計画の作成等、全教員の共通理解の下に「全教員による教育相談（生徒の理解と支援）」を実現しなければなりません。

5 進路指導部

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
☆ 中間自己評価	2. 9	2. 9	3. 1
☆ 年度末自己評価	2. 9	2. 9	3. 2

(1) 分析結果

- ①全体的には、概ね高い評価を得ています。特に、「模擬試験、講習など進学指導に関する実践事項が予定どおり行えたか」の評価項目が高いポイントになっています。
→ 3年間を見通した進路シラバスに基づいた進路指導が確立してきました。それとともに、評価項目の設問が「実践事項が予定どおり行われたか。」となっていることにも起因していると思われます。
↓
個人の意見の中にも進路指導部の評価項目について、「予定通り行われたかどうか」という聞き方では、評価基準としてなじまないのではないかと、というご意見が複数ありますので、ご検討ください。
- ②本校でもよく言われている「受験は団体戦」という意識を持ち、「チーム滝川」で受験に臨める体制を作っていきましょう（進路指導部主導による3年間を見通した進路指導の充実）。また、「第一志望宣言」をより強固なものにしていく必要もあります。
→ 3年間を見通した進学講習や模擬試験について検証し、更なる高みを目指して、課題の検討をお願いします。
- ③進学指導だけでなく、人としての生き方や在り方を考えさせたり、勤労観・職業観の育成等キャリア教育の充実についても考えなければなりません。
→ インターンシップの拡大等、外部機関と連携した取組を検討してください。

6 SSH・理数科部

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
☆ 中間自己評価	2. 8	3. 0	2. 9
☆ 年度末自己評価	3. 0	3. 0	2. 9

(1) 分析結果

- ①「SSH事業を推進するため、全校体制をとることができましたか。」という項目が、0.2ポイント下がり、本校の弱点とされる基準の2.5になった。

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
☆ 中間自己評価	2. 5	2. 7	2. 6
☆ 年度末自己評価	2. 6	2. 8	2. 5

- 1/25(月)に行われた「SSHの2期目の継続に向けた校内研修会」では、4つのグループに分かれてKJ法を用いた話し合いが行われました。その中でもやはり、「自分はSSHとの関わりはあまりないし、SSHに関係している人は忙しそうにしているのだけが分ります」

というご意見がありました。まさにこのことがSSHの2期目の継続における最大の課題ではないでしょうか。つまり、現在、主に理数科で行われているSSH事業を普通科にも拡大し、全校体制で実施することで、学校づくりの起爆剤・学校発展の契機になります。今回の校内研修で出された成果と課題を共有し、教員全員が主体的にSSH事業に関わっていくという意識改革が必要です。

↓
そのためには課題研究発表会等、SSHの取組にぜひ参加していただき、生徒の活動をみていただきたいと思います。

- ②各中学校での高校説明会でのSSHのPR、取組（オープンスクールでの講演やサイエンスデーにおける地域との連携）、SSH関係の報道が滝川高校の強みやPRにつながっています。

↓
実際に今年度の高校入試の当初出願倍率は、普通科で1.1倍・理数科で1.2倍になりました。

↓
今後は、いかに理数科を活性化させ、普通科や定時制も含む滝川高校全体への相乗効果として波及させていくのが重点課題になります。

☆いじめの項目

「『いじめ』防止に対して全校体制で取り組んでおり、小さなサインを見逃さず、早期発見・早期対応・早期解決ができていますか」

- 評価自体は、昨年度と同様に3.1と変わりありませんでした。ただ、今年度、いじめ調査では3件の訴えがありました（いずれも大きな問題にはありませんでしたが）。いじめは、どの学校でも起こりうる、という認識の下、「いじめは絶対に許さない」という学校体制の確立が求められています。そのためにも日々の生徒との関わりを大切にしていきましょう。